



松平定信の社参と神号額

老中松平越中守定信は寛政五年（一七九三）に当社に参拝しました。その前年にはロシアのラクスマンが根室に来航するなど、異国船警備の対策が急務とされる時局であり、江戸湾から伊豆・房総の海岸線の視察をするなかでの社参でした。

視察には画家の谷文晁が同行し、沿岸の風景を記録しましたが、これが「公余探勝図」といふ画帳となり、国宝指定されて、東京国立博物館に所蔵されてゐます。この中に「武州金澤昇天山九覽亭旧跡眺望」と題して金沢八景の絵も残ってゐます。



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいてゐる大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいて、生かされてゐるのです。



定信は

この出張
中に老中
を免ぜら

れ、文化九年（一八一二）には隠居して楽翁と号しましたが、同十四年（一八一七）に自ら揮毫した「瀬戸之神社」の神号額を奉納してゐます。

「国家鎮護」の祈りを籠めての奉納であったでせう。この額は永らく拜殿向拝に掛けられてゐましたが、現在は淑月館展示室にて御覧いただけます。

また「集古十種」といふ全国の文化財の記録も編集しましたが、これにも当時の瀬戸神社境内にあった梵鐘の銘文の拓本が掲載されてをります。

令和八年祭事暦

- 一月 一日 歳旦祭
- 鶏鳴神事
- 二月 三日 節分祭
- 二月 二三日 天長祭
- 三月 二〇日 春季大祭
- 祈年祭・合祀神例祭
- 四月 二九日 昭和祭
- 五月 十五日 例大祭
- 神社本廳献幣使参向
- 琵琶島弁天社へ神輿渡御
- 六月 三〇日 大祓式
- 大祓人形納め・茅の輪神事
- 七月 五日 天王祭出御祭
- 本社神輿御霊入・宮出渡御
- 七月 七日 三つ目神楽
- 無形文化財湯立て神楽
- 七月 一二日 天王祭巡幸祭
- 天王神輿町内巡幸
- 七月 十九日 手子神社例祭
- 九月 一日 浅間神社例祭
- 九月 一七日 熊野神社例祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一〇月 一八日 手子神社秋祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一二月 二三日 秋季大祭
- 新嘗祭
- 二月 八日 歳の市
- 開運熊手授与
- 二月 三一日 大祓式
- 大祓人形納め
- 毎月 一日 月次祭

神棚の祀り方と「いのり」

大きな「いのり」

神宮大麻を祀る意味

「おふだ」と「お守り」

毎日神社にお参りする日参を続けてをられる方もいらっしゃると思います。しかし多くの方は日々のお参りはできません。

そこで家庭に神棚を設けて、神社のお札をお祀りし、そこに手を併せて祈ります。

更には、日常的に身に付けて携帯し、「いのり」を持続することができるとするものが「お守り」です。

「お守り」の袋には小さなお札が封入されてゐますので、そこに「いのり」をこめるのが「お守り」を持ち歩く意味なのです。

「合格」とか「交通安全」「病氣平癒」など、お守り袋には区別がありますが、飲めば効き目のある薬のやうに、持ってゐれば効果のあるといふものではありません。お守りを身に着けることで「いのり」を持続することになります。

その「いのり」があつて「合格」や「交通安全」そのほかの御利益に繋がるものとなるのです。

家族がそろつて一家の「いのり」を共有するのが「神棚」のまつりであり、個人で「いのり」を携帯するのが「お守り」なのです。「神棚」にも「お守り」にも神社のお札が祀られるのです。

氏神様と神宮大麻

神棚には氏神様のお札と、神宮大麻とを併せてお祀りするのが基本とされてゐます。

氏神様は産土神（うぶすなのかみ）とも云はれ、皆様がお住まいの地域の神様です。

（言語的には氏族の祖先神でしたが、村落共同体の守護神を氏神と称するやうになりました。）神棚への「いのり」は家族一人一人の「いのり」を家庭で共有することになります。

個人個人の健康や安全は家族全員にとつても家庭の幸福の基盤です。個人の希望や努力が稔りあるものとなるのは家族一同にとつても大いなる喜びです。

そこにむけての「いのり」を共有することを具体化するのが神棚への「いのり」と言へます。個人の「いのり」が叶へられることは家族にとつてももちろん、地域の社会にとつても望ましいことです。

商売繁昌の「いのり」が叶へられることは、自分だけが儲かったといふのではなく、取引先や顧客なども含めての繁栄でなくてはなりません。

交通安全は、自分だけが安全だったのではなく、社会全般にとつても安全でもあります。

私たちの個人の「いのり」は一面してエゴイズム的な「いのり」に見えるかもしれませんが、それが家庭からさらに周辺の社会と共有されることによつて、より大きな「いのり」となつて、御神慮にも叶ふものとなつてゆきませう。地元の産土神・氏神様のお札を通して、個人や家族の「いのり」

谷津町鎮座

浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まった中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かったと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭（近くの土日曜）には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年（一四六三）西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとの地の領主伊丹左京亮が、文明五年（一四七三）瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年（一六八〇）、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加えました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日（現在はその後の日曜日）ですが、十月十五日（前後の日曜日）の秋祭りには、古式豊かな湯立神樂が昔ながらの伝統を守って行はれます。

境内の洞窟にお祀りする竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあったもので、厄除け、開運の福神として信仰されています。

は地域社会に共有されるより大きな「いのり」にパワーアップされるのです。

さらにそこに神宮大麻も祀られてみると、その「いのり」は地域社会の枠を超えた国家的・世界的な規模の「いのり」へとバージョンアップすることができるわけです。

神宮大麻とは？

神宮大麻は「じんぐうたいま」と読みます。伊勢の神宮のお札です。日本国中で「いのり」を共有する「総氏神」とも云われるやうに全国で頒布され祀られます。

江戸時代には伊勢の御師と呼ばれる神職が全国に配札していました。その当時は、「お祓い大麻」とも呼ばれました。

神社に正式参拝するときに、麻を束ねたものを串の先に付けた「大麻」（「おほぬさ」と読みます）を振ってお祓ひを受けた経験があたりでせう。

御師が伊勢で大祓の祝詞を奏上し、その「いのり」を込めた祓のしるしの麻を封入したお札が「お祓い大麻」でした。この伝統から、神宮のお札を「大麻」と称する

のです。

天皇陛下の「いのり」

伊勢の神宮は、日本国中の総氏神ともされますが、その根本的な性格は、天照大御神からお授かりになった御鏡を歴代の陛下が変はることなく祀り続けてこられた天皇の祭祀を主体とする神宮であるといふことです。

ですから神宮の祭祀は天皇の祭祀であり、「いのり」は天皇の「いのり」であります。

天皇の「いのり」は公平無私の世界の平穩、人類の福祉に及ぶ広範無邊の大きな「いのり」であらせられます。

神宮大麻には、この天皇の「いのり」が根底にあるお札を私たちが分け戴く意味があります。

家庭の神棚に、神宮大麻が祀られるとき、私たちは天皇陛下の「いのり」を共有することとなるのです。

個人的なエゴに陥りやすい小さな「いのり」を、広大な、大きな「いのり」としてゆくことで、私たちの暮しをより豊かな実りあるものとしてゆきたいものです。

朝比奈町鎮座

熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひまします。仁治二年（一二四一）、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年（一六九五）、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典（記念事業として新たな拝殿を建築竣工して今日に至っています）。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのっとった湯立神樂が今も続けられています。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にまで信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳勅幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年に屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行われました。社務所(淑月館)は令和大禮記念事業として令和二年三月に竣工しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれてゐます。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらつしやいます。

第二十回目の

こども宮相撲大会

高砂部屋の力士を迎えて

恒例の行事となってきた「こども宮すもう大会」も、一時コロナ禍での中断がありました。今年第二十回目となり、去る六月七日に行われました。

晴天に恵まれ、九〇名のちびっ子が元気に取り組み、境内は歓声につつまれました。

特に今年の大会には、高砂部屋の力士と行事さんが参加していただき、模範演技だけでなく子どもたちとふれあい、楽しい時間を過ごしてくださいました。

参加頂いたいたしたのは、朝興貴、



朝志勇、朝大洞の力士三名と行事の木村悟志さんです。

土俵作りは瀬戸神社奉仕会の「玉垣会」の皆さんで取り進め、横浜金沢八景ロータリークラブが共催、金沢八景共栄会の協賛もあり、また学生会 HAKKEY+の皆さんもお手伝ひくださって例年の運営がされてゐます。ご協力を感じいたします。

瀬戸神社 (〒三六〇〇二七)

横浜市金沢区瀬戸十八ー十四

(電話) 〇四五七〇ー一九九九二

(FAX) 〇四五七〇ー一九九九四

<http://www.setojinja.or.jp>